

— 報 告 —

看護学導入時期の学生が感じる困難性の検討

大久保 暢子¹⁾, 佐竹 澄子²⁾, 大橋 久美子¹⁾,
 佐居 由美¹⁾, 伊東 美奈子¹⁾, 蜂ヶ崎 令子¹⁾,
 安ヶ平 伸枝²⁾, 石本 亜希子³⁾, 菱沼 典子¹⁾

抄 録

本研究の目的は、看護系大学における看護学導入時期の学生の困難性を明らかにすることである。研究デザインは因子探索的研究で、研究方法は困難性に関するグループ・インタビュー、および観察者がインタビュー中の対象者の反応を観察ガイドに添って観察した。分析方法は、研究データのカテゴリー化を行い、サブカテゴリーとカテゴリーの抽出、更にデータの件数を算出し、困難性の頻度を出した。

結果、困難性は、5カテゴリーが抽出でき、データ件数の多い順から【今までとは異なる学習方法】、【慣れない環境】、【科目の位置づけの認識不足】、【学習資源の不便さ】、【看護学に対する学習意欲、動機づけの違い】であった。これらの困難性は、我が国の大学—高等学校教育の現状、世代の特徴などが背景にあると推測でき、今後、これらの要素を踏まえた看護導入プログラムを開発していく必要があると考えられた。

キーワード：看護基礎教育、困難性、看護学生、generation Y、初学者

I. 研究の背景

少子高齢社会における国民の健康生活を支える看護職の重要性が認識され、大学での基礎教育への移行が急速な伸展をみせている。また、少子社会は大学全入時代といわれ、看護系大学でも定員数の拡大とともに進学はより容易になっている。しかし、大学卒業者は卒業時の看護実践能力が未熟であると多く指摘され、文部科学省の「看護学教育の在り方に関する検討会」報告にて、学士課程における看護基礎教育の内容や到達目標が提示され、各看護系大学には教育課程の改善・充実に向けた取り組みが期待されている（日本看護協会、2005）。

さらに近年、核家族化や少子社会における若者の生活体験の乏しさや人間関係の希薄さが話題となっており、一般の大学生の成熟度やコミュニケーション能力の低さ、また大学進学がゴールとなり入学後に目標を見失う等のことがいわれている。看護教育の場においては、1980年代前半から看護学生の質の変化は生活習慣の変化や生活技術能力の低下として患者の日常生活援助の方法である基礎看護技術の習得に影響を及ぼす現象と指摘されてきたが（氏家他、1983；野々村他、1989）、2000年

前後から、日常的な学校生活、学内演習、臨床実習でみられる学生の問題行動に起因する現象として生活体験不足（松下他、2002；萩原他、2004）や対人関係の乏しさ（長家、2003；伊丹他、2005）が話題となっている。こうしたことから、日常生活のあり方が激変している今日の社会では、大学入学前に生活体験を通して獲得する生活技術や対人関係能力などの看護学の学習に必要とされる基礎能力が一層低下しており、入学前の学習準備状況の変化は否めず、入学後の学習に支障をきたすことも考えられる。よって、看護系大学の教育の充実・改善に取り組む上では、少子社会・大学全入時代の学生の入学前の学習準備状況にあわせた看護学の導入方法を検討する必要がある。

しかし入学前の学習準備状態として看護系大学の一年生を対象者にした生活経験・体験・習慣などの実態調査（田島他、1994、小野他、2003）はわずかであり、実態を基に教授学習方法を検討する研究的取り組みは見当たらず、加えて、学生の困難については、グループワークという学習形態（藤野、2005）や採血・注射演習時の技術習得（成田他、2005）、実習中の看護過程の展開（青木他、2003）等に関する研究はあるが、大学入学後に初

受付日：2010年11月11日 受理日：2011年1月27日

1) 聖路加看護大学、2) 前聖路加看護大学、3) 初台リハビリテーション病院

めて看護学を学ぶ時期の学生が直面する困難そのものに焦点を当てた研究はない。

そこで、本研究は、少子社会・大学全入時代の学生の学習準備状況に合わせた看護学導入プログラムの構築に向けた研究の一環として、大学入学後の学生が看護学導入時期に感じた困難性について調査し、看護学導入プログラムの構築の基礎データとすることを目的とした。

II. 研究目的

看護系大学における看護学導入時期の学生の困難性を明らかにする。

III. 操作的用語の定義

a. 看護学導入時期：看護系大学入学後の一年間を指す。

b. 困難：看護学導入時期に大学生活や導入科目において、学生が「困った」「戸惑った」と感じたこと。

c. 困難性：学生の困難の内容とその度合いならびにその困難が生じた要因を含めた現象をさす。

d. 導入科目：看護系大学入学後の1年間で履修する科目のことで、基礎看護学系の科目、例として看護学概論や看護技術関連の科目をさす。

IV. 研究方法

1. 研究デザイン

因子探索的研究

2. 対象者

下記の条件を満たす看護系大学の1年終了時の学生で、協力の同意が得られた者。

- 1) 年齢が、18～20歳の者。
- 2) 大学入学が初めての者。

3. データ収集時期及び方法

- 1) データ収集時期は、大学1年終了時期で2008年3月～5月。
- 2) データ収集方法

(1) グループ・インタビュー法

調査員と学生間の力関係の作用をできるかぎり排除し、参加者同志の自由なディスカッションの中でグループの相互作用が起こり、相乗効果、連鎖反応、刺激、安心感、自発性 (Vaughn et al., 1996) によって、学生個々の考えがより深められ、豊富なデータが得られることを想定した。

①インタビューの内容

- ・大学入学時に感じた困ったこと

例) 看護学の導入科目での授業の形態で困ったこと、戸惑ったこと、看護学の導入科目での内容理解で戸惑ったこと等。

(2) インタビューの方法

①インタビュー依頼と日時の決定方法

インタビュー依頼はポスターで公募し、研究協力への意思がある学生が自ら調査者（調査員はすべて学業成績や教育に携わる教員以外の人員を設定した）へメールにて連絡を取った。

②調査員が対象者5名ほどのグループを無作為に構成し、日程調整を行い、調査員が日程とインタビュー場所の連絡を行った。

③当日、インタビュー前に調査員が、再度研究目的と方法を文書と口頭にて説明し、協力同意の確認を行った。

④1グループにつき60分程度の時間で、インタビュー内容に関して自由にディスカッションをしてもらった。進行は、司会者（調査員）がインタビューガイド沿いながら、自己紹介と今回の目的の説明をした後に、主要内容（困ったと感じたこと）を簡単に問いかけることから始めた。その後は目的から反れない様に、適宜話題提供や詳しく聞きたい事を尋ねるなどして発言の促進へ配慮し、メンバーの自由な発言を妨げないようスムーズな進行を心がけた。

(3) インタビュー中の記録方法

①インタビュー内容は、事前の了承後、ICレコーダーに録音した。

②司会者（調査員）1名が、進行の妨げにならない程度に、インタビューの要点や気づいた点などをメモに取り、分析データ補足情報とした。

③別の調査員（観察者）1名がインタビュー状況を観察ガイドにそって観察した。観察ガイドには、観察の開始及び終了時期、観察方法が記されており、特に観察方法については、グループ・インタビュー時に学生の反応（学生の意見に他学生があいづちを打つ、うなづく、声を出して同意する、同意せず首をかしげる、声を出して反意する等）を詳細に観察することを記した。また観察者は、インタビューグループの輪から離れた場所で、発言は避け、観察のみに徹する状況で観察を行った。

(4) 対象者の属性の収集

インタビューの前にフェイスシートに属性（性別、婚姻状態、家族構成、一人暮らしの有無、同居人の有無、分析結果の内容確認が可能かどうか）の記入を依頼し、収集した。

4. 分析方法

録音したインタビュー内容を逐語録にし、困難性に関する内容のサブカテゴリー及びカテゴリー化を行った。その際に、インタビューデータ及び観察者が収集した学生の反応をデータ件数としてカウントし、困難性の頻度の程度として扱った。学生の反応のカウント方法は、グ

ループ・インタビュー時の学生の意見に他学生があいづちを打つ、うなづく、声を出して同意する、同意せず首をかしげる、声を出して反意する等の反応をカウントし、インタビュー時間内にその話題が何回認められ、その際に何人の学生が同意／反意していたかを延べ件数として算出した。また首をかしげる、声を出して反意するといった件数は、同意の件数から減算した。驚きに対する反応は、同意／反意のいずれにも相当しない反応と捉え、カウントせず、学生の意見に疑問を示す反応は、反意の反応と捉え、減算を行った。

5. 真実性の確保

インタビューは、話が中断されない集中できる場所を確保して行い、司会者と観察者にはガイドを設けて、必要なデータを確実に収集できるようにした。分析は、抽出カテゴリーは、複数研究者間で、内容の確認と一致の確認を行ない、分析終了時には、カテゴリーの内容の確認を対象者1～2名から行い、内容の真実性の確保に努めた。内容確認の対象者は、インタビュー当日に後日の確認が可能であるとした者に対して行ない、確認時には調査員が日時連絡と実際の内容確認を行った。

V. 倫理的配慮

1. 本研究は、教員が研究者であり、対象者が学生であることから、強制力が作用することは免れない。従って、参加の任意性と匿名性を確保するため以下の内容に配慮した。

- ・研究の目的と内容を記載した調査協力のポスターを掲示し公募した。
 - ・研究参加は自由意思で、任意に基づくものであること、参加途中でも中断可能であることを明記した。
 - ・匿名性の保持のため、研究協力の意思がある際には教員以外の調査員に学生自らが連絡をとること、インタビューは教員以外の調査員が行なうこと、データ分析時は、匿名化し、逐語録は外部業者が作成する旨を明記した。
 - ・調査協力の有無やインタビュー内容については学業成績とは一切関係しないことを明記した。
 - ・インタビュー当日に再度文書にて調査員が説明を行ない、同意の確認を行った。その際には匿名性を考慮して、同意書にはサインは行わなかった。
2. 研究発表時には大学名及び対象者の匿名性の保持とプライバシーの保護に努めた。
3. 研究終了後に、調査員が録音したICレコーダの記録と対象者の連絡先を消去した。
4. 聖路加看護大学研究倫理審査委員会において承認を得た(承認番号07-92)

VI. 結果

1. 対象者の概要

研究対象者は、計15名(男性2名、女性13名)で、年齢は18-20歳であった。対象者の背景としては、全対象者が未婚、兄弟姉妹のいる者15名中14名(93%)、兄弟姉妹なしが1名(6%)であった。さらに一人暮らしが15名中9名(60%)、親と同居が4名(27%)、親と兄弟姉妹と同居が2名(13%)であった。

2. 困難性のカテゴリーとサブカテゴリー

看護学導入時期の困難性を構成していたカテゴリー、サブカテゴリーを表1に示す。また以下では、カテゴリーを【 】, サブカテゴリーを< >, 対象者のインタビューデータの一例を個人が特定できないように修正を加えた上で「 」で示した。

1) カテゴリーA:【今までとは異なる学習方法】

カテゴリーA:【今までとは異なる学習方法】は、大学で必要とされる学習方法が、高校もしくは今まで遂行してきた方法とは違うことを示している。このカテゴリーは、9つのサブカテゴリーから構成され、<a. 高校と大学の教育内容の違い>, <b. 演習記録の書き方, 技術演習の自己学習の仕方が分からない>, <c. グループワークという学習形態への不慣れ>, <d. レポートの書き方が分からない>, <e. 技術演習があることでの精神的重圧>, <f. 課題が多い>, <g. 学業に対する評価方法の不明瞭さ>, <h. パソコン操作が分からない>, <i. 課題提出の期限厳守についていけない>であった。

サブカテゴリー<a. 高校と大学の教育内容の違い>は、「高校までは問題に対して正しい答えをするという方法だったけど、大学にきたら答えがあるわけではなく、課題に対して自分の考えを出して、それを文章にするという方法になって、勉強の仕方がまったく違って戸惑った」、「自分の考えや根拠を説明してみても言われるけど、マル/バツ形式の答えを見つけることしかしてこなかったから出来ないよ〜って感じ」などから抽出できた。次に、<b. 演習記録の書き方, 技術演習の自己学習の仕方が分からない>は、「演習記録は図書館で調べて、さらに自分で考えて書くことを求められていることが、初めは全く分からない」、「技術演習も一人で練習していると間違っても気づかないし、誰かとしないと上手いかない」などから抽出でき、<c. グループワークという学習形態への不慣れ>は、「高校は個人戦でやってきたから、協力して行う学習方法は、ギャップが激しく戸惑った」、「自分の言いたいことが言えず、どんどん言っている人がいて、すごいな〜ってショックだった」などの抽出、<d. レポートの書き方が分から

表1 カテゴリー別のサブカテゴリー、データ件数一覧

カテゴリー	サブカテゴリー	データ件数	データ合計
A. 今までとは異なる 学習方法	a. 高校と大学の教育内容の違い	108	285
	b. 演習記録の書き方、技術演習の自己学習の仕方が分からない	39	
	c. グループワークという学習形態への不慣れ	27	
	d. レポートの書き方が分からない	27	
	e. 技術演習があることの精神的重圧	27	
	f. 課題が多い	21	
	g. 学業に対する評価方法の不明瞭さ	15	
	h. パソコン操作が分からない	15	
	i. 課題提出の期限厳守についていけない	6	
B. 慣れない環境	a. 掲示板からの大学行事の情報収集	63	87
	b. 今までとは異なる通学手段	15	
	c. 学業・アルバイト・家事の両立	9	
C. 科目の位置づけの 認識不足	a. 科目の重要性が分からない	39	69
	b. 科目と看護学との関連性が分からない	30	
D. 学習資源の不便さ	a. 学習物品の不足、使いにくさ	27	60
	b. 教職員・指導者への聞きづらさ	21	
	c. 学習リソースの活用方法の不明確さ	12	
E. 看護学に対する学習意欲、動機づけの違い		15	15
	合計		516

ない>は、「レポートを書いたことが無かったから、書き方が全然分からなかった」、「フォントを一緒にしなければならなかったり、文献を書かなきゃいけなかったみたいだけど、分からないから、何で減点されたのかな〜って、初めは、怒りが出てきた。」から抽出できた。加えて、< e. 技術演習があることの精神的重圧 >は、「演習は緊張しすぎて何やっているか分からなくなっちゃう」、「演習期間はプレッシャーで追いつめられる、やらなきゃって」など抽出でき、< f. 課題が多い >は、「勉強し過ぎなんじゃないとか他大学の子に言われて、他の大学の友人は遊んでいて、その子たちと比べてしまう」、「レポートや試験、演習とか日程的に過酷。実技試験なんて練習しないとイケない訳だし」などから、< g. 学業に対する評価方法の不明瞭さ >は、「自分の成績は何を減点されているのか分からない」、「試験用紙が返却されないことがあるから、間違ったところが分からず、間違ったままだと思う」、「評価の仕方が分からないから納得いかない成績もある」から挙げた。< h. パソコン操作が分からない >は、「パソコンの使い方が分からず、頭で考えているスピードと打つスピードが違うから上手く文章にできなかった」、「ワードも使えないのに、表作れとか言われても困る」から、< i. 課題提出の期限厳守についていけない >は、「なんでも提出物は時間きっちり、びっくり」、「厳守って分かってても出来ない、すみませんって謝った上で、遅延理由書も必要で・・・」などから抽出出来た。

2) カテゴリーB：【慣れない環境】

カテゴリーB：【慣れない環境】は、高校時代もしくは今まで慣れ親しんできた生活環境とは異なり、初めて遭遇する自分を取り巻く環境のことを示している。このカテゴリーは、3つのサブカテゴリーで構成され、< a. 掲示板からの大学行事の情報収集 >、< b. 今までとは異なる通学手段 >、< c. 学業・アルバイト・家事の両立 >であった。

サブカテゴリー< a. 掲示板からの大学行事の情報収集 >は、「大学の授業変更、休講の掲示にすぐに気付けない」、「連絡事項が大学の方から個々に来なくて、掲示されるので、情報が分からない」などから抽出でき、< b. 今までとは異なる通学手段 >は、「満員電車に乗ったことがなかったから、毎朝、また乗るのかと思うと起きたくない」、「高校までは自転車だったけど、今は朝早くから長い時間、満員電車に乗っていて、つらい」などから抽出できた。さらに< c. 学業・アルバイト・家事の両立 >は、「アルバイトから帰ってきて、勉強なんてとても無理」、「一人暮らしになって、大学の課題もたくさんあって大変で、今までしてなかった家事もしなくちゃいけなくて大変」などから挙げた。

3) カテゴリーC：【科目の位置づけの認識不足】

カテゴリーC：【科目の位置づけの認識不足】は、大学で受講している科目が何を学ぶ科目であるのか、今後の科目もしくは看護学にどう繋がるのかについて認識が不十分であることを指している。2つのサブカテゴリー

から構成され、それらは、< a. 科目の重要性が分からない>、< b. 科目と看護学との関連性が分からない>であった。

< a. 科目の重要性が分からない>については、「科目名を聞いて、何を学ぶ科目なのか分からなかった」、「あいまに授業受けていたから、あとで授業の意味が分かるっていうか、終わってから大事な科目だったんだって分かる。はじめは意味も分からずなんとなく受けていた。」などから抽出できた。< b. 科目と看護学との関連性が分からない>は、「2年近くになって看護を具体的にやりだしてから、だから、あの科目にあの課題があったのか〜って分かった」、「初めは全然見えてなくて、じっくりこななかった。今は演習するのに、あの授業内容が大切だと分かる」などから挙げた。

4) カテゴリーD：【学習資源の不便さ】

カテゴリーD：【学習資源の不便さ】は、大学での学習時に、必要物品の不足、活用方法や適切な教員の不明確さといった、学習するための物資や人材の不便、不自由さを示している。構成するサブカテゴリーは3つであり、< a. 学習物品の不足、使いにくさ>、< b. 教職員・指導者への聞きづらさ>、< c. 学習リソースの活用方法の不明確さ>であった。

< a. 学習物品の不足、使いにくさ>については、「看護技術演習室の物品数が少なくて、取り合いになるし、場所も取り合いになって大変」、「教室も狭くて、後ろに座る学生が授業を受けにくい状況になってる」などから抽出され、< b. 教職員・指導者への聞きづらさ>は、「どの先生に尋ねればよいか分からなかった」、「講義で先生が、学生が分かっているものとして話すこと多いから聞きづらい」などから挙げた。< c. 学習リソースの活用方法の不明確さ>は、「大学で指定されている教科書だけでは足りないことが多くて、どの参考書を買っていいのかわからない」、「必修科目が多いから、興味ある選択科目を取ると、これから負担が多くなるんじゃないかと思って取れない。」などから抽出された。

5) カテゴリーE：【看護学に対する学習意欲、動機づけの違い】

カテゴリーE：【看護学に対する学習意欲、動機づけの違い】は、大学の同級生同士が抱く看護学に対する学習意欲や駆り立てられる思いの違い、程度の差を指している。このカテゴリーは、「看護師志望の学生がたくさんいて、みんなちゃんと考えて入ってきているんだなと思った」、「他の道もあるんじゃないかと思ったりして、逃げ出したくなる」といったインタビューデータから抽出され、サブカテゴリーとして分類できず、一カテゴリーとして扱った。

3. カテゴリー、サブカテゴリーからみる困難性の頻度について

表1に示すとおり、看護学導入時期に学生が感じる困

難性として、【今までとは異なる学習方法】のデータ件数が最も多く、困難と感じる頻度が多かった。理由として「高校と大学の教育内容の違い」、「演習記録の書き方、技術演習の自己学習の仕方が分からない」が多く認められていた。次に【慣れない環境】が多く、「掲示板からの大学行事の情報収集」、「大学生であることの戸惑い」が理由として挙げた。続いて、【科目の位置づけの認識不足】、【学習資源の不便さ】、【看護学に対する学習意欲、動機づけの違い】の順でデータ件数が多く、困難性として表現される頻度が多かった。

Ⅶ. 考察

本研究により、看護学導入時期に学生が感じる困難性の内容が明らかになり、大学生となり生活環境や学習方法の変化に適応していくことに困難を感じていることが分かった。このような変化は、いつの時代にも存在していたと推測できるが、現在の学生がより困難を感じている内容でもあり、それは社会背景や世代の特徴が関係していると考えられた。

最もデータ件数の多かった困難性「今までとは異なる学習方法」では、グループワークという学習形態への不慣れやレポートの書き方が分からない、大学では正しい答えが高等学校時のように提示されず、自分の考えを問われる教育内容の違いなどが多い理由として挙げた。これらの困難性は、ゆとり教育世代の学生であっても、高等学校までの受験で要求される記憶力と解答型の思考が大学では要求されず、答えはなく自ら創造し考えを深めることを求められる大学教育と高等学校教育のギャップを作っている我が国の教育事情が根底にあると考えられる。近年、文部科学省では、高等学校教育が大学受験対策に未だに依存していることを指摘し、大学入試を多様化し、学力検査のみの評価を再検討する方向性を示している（中央教育審議会大学分科会制度・教育部会 学士課程教育の在り方に関する小委員会, 2007.）。さらに看護は生涯学習であることから、各看護学生、看護職者は主体的、創造的に思考し、看護を開発していく能力が必要であると強調されている（文部科学省 看護学教育のあり方に関する検討会, 2004.）。しかしこれらの課題は解決されておらず、未だ高等学校と大学の教育連携にも至っていないと言える。さらに、同省では、高等学校から大学への円滑な移行、大学での学問的・社会的な諸経験を成功させることを目的に、大学入学初期に獲得すべき能力として「レポート・論文などの文章技法」・「プレゼンテーションやディスカッションなどの口頭発表の技法」・「論理的思考や問題発見・解決能力の向上」・「図書館の利用・文献検索の方法」・「コンピューターを用いた情報処理や通信の基礎技術」などを挙げている（中央教育審議会大学分科会制度・教育部会 学士課程教育の在り方に関する小委員会, 2007.）。これらの

内容は、本研究で明らかとなった困難性と同様の内容であり、困難を感じる内容である一方、我が国が大学初学者に求めている重要な要素でもあることから、出来るだけ困難を感じることなく、これらの内容を能力として獲得できるよう、大学初学者に対する教育方法を検討、開発することが急務であると考えられた。

次に多く認められた困難性「慣れない環境」については、掲示版からの大学行事の情報収集や学業・アルバイト・家事の両立など、初めて遭遇する環境の中で、大学生としての生活を自己管理することの難しさを感じていたと考えられた。これらの困難性は、“Generation Y”もしくは、“Millennial Generation”などと呼称される1980～2001年生まれの世代の特徴が反映していると考えられ、いわゆる豊かで少子社会に大切な子として生まれ、両親が塾や習い事を計画的に組み込み、事前に両親が子供の生活を安全に管理してしまう Generation Y の特徴が影響し (Lower, 2008)、時間感覚や自己管理能力に欠ける傾向が上記の困難性を生じさせる要因になっていると推測した。さらに、「レポートの書き方が分からない、演習記録の書き方や自己学習の仕方が分からない」の困難性は、いつの時代も大学初学生が感じ、学生生活が進むにつれて友人間の交流と支え合いで解決していく内容であると言えるが、特に近年は、学生間のコミュニケーションが不足し、学生同士の学習方法の共有や伝達量の少なさ、他人に興味を持たずに自己充足的な学習を行う傾向が強く影響していると考えられた (Arhin & Cormier, et al. 2007)。そのため、今まで以上にそれらが困難性として浮き彫りになってきており、これも、Generation Y 世代の特徴であると捉える事が出来た。この Generation Y の特徴である時間管理能力、コミュニケーション能力の欠如は、臨床に出た際にも問題とされており (Greene, 2005)、看護基礎教育の時点から視野に入れて教育していく必要がある。

「看護学に対する学習意欲、動機づけの違い」の困難性は、I. 研究の背景で記した通り、大学全入時代の中で、目的意識、動機づけの希薄な学生が増えている現状が浮き彫りになった結果と言える。「科目の位置づけの認識不足」においては、他の既存文献では見当たらない結果であった。科目の位置づけは、その科目の受講目的・ねらいとして学生が周知すべき内容であるにも関わらず、教員が科目の授業開始時に説明を怠る傾向にあり (文部科学省高等教育局大学振興課大学改革推進室, 2006) このことが、科目に対する学習意欲の妨げ、看護学導入の困難性を引き起こす原因になっていると考えられる。授業回数が少なく、科目の各論に時間を掛けたい教員の思いは理解できるが、科目の最初に「本科目の重要性、看護学との関連性」を丁寧に説明し、後に各論に入るのが効果的だと推測できる。

本研究結果から得られた看護学導入時期の学生の困難性は、上記考察より、我が国の大学 - 高等学校教育の現

状、世代の特徴などが背景にあることが分かった。今後、これらを踏まえて看護学導入時期の学生に対する看護基礎教育における看護学導入プログラムを開発していく必要がある。

VIII. 研究の限界

本研究は、対象人数が15名と少数であったこと、観察者による観察の制限から、困難性の頻度の分析に限界があったことは否定できない。

IX. 結論

看護系大学における看護学導入時期の学生の困難性を明らかにすることを目的にグループ・インタビューを用いて因子探索的研究を行った。

結果、困難性は、5カテゴリーが抽出でき、データ件数の多い順から【今までとは異なる学習方法】、【慣れない環境】、【科目の位置づけの認識不足】、【学習資源の不便さ】、【看護学に対する学習意欲、動機づけの違い】であった。これらの困難性は、我が国の大学 - 高等学校教育の現状、世代の特徴などが背景にあると推測でき、今後、これらの要素を踏まえた看護学導入プログラムを開発していく必要があると考えられた。

本研究のインタビューに御協力いただきました学生の皆様に心から感謝申し上げます。なお本研究は、文部科学省科学研究費基盤研究B『少子化社会の学生の特性に合わせた看護学導入プログラムの開発』（課題番号19390551 研究代表者 聖路加看護大学 菱沼典子）によって行われた研究の一部であり、本稿の内容の一部は第28回日本看護科学学会学術大会で発表しました。

引用文献

- Afua O Arhin, Eoleen Cormier (2007). Using Deconstruction to Educate Generation Y Nursing Students. *Journal of Nursing Education*, 46(12). 562-567.
- 青木光子, 相原ひろみ, 徳永なみじ他 (2003). 看護過程の展開における学生の困難 講義・演習終了後と実習終了後の分析より. *愛媛県立医療技術短期大学紀要*. 12(16). 55-61.
- 藤野ユリ子 (2005). 看護学生がグループワークで感じる困難と満足との関係. *日本看護学教育学会誌*. 15(1). 1-14.
- 萩原美樹, 山本真紀子, 矢野恵子 (2004). 臨地実習前の看護学生の生活体験に関する実態調査. *三重看護学誌*. 6. 91-96.
- 伊丹君和, 亀澤里恵子, 河合小百合他 (2005). 看護学

- 生における生活体験・対人関係の実態と他者意識との関連. *日本看護学会論文集 第36回看護教育*. 36. 209-211.
- Jan Greene. (2005) : Different generations different expectations, *Hospital & Health Networks*, 34-45.
- Judith Lower. (2008) : Brace yourself here comes generation Y, *Critical Care Nurse*, 80-84.
- 松下由美子, 辻あさみ (2002). 看護短期大学生の生活体験の実態—単身生活者と同居生活者の比較検討から—. *日本看護学会論文集 第33回看護教育*. 33. 12-14.
- 文部科学省 高等教育局大学振興課大学改革推進室 (2006) : 大学における教育内容・方法の改善等について 授業設計と教員の教育責任, http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigaku/04052801/003.htm, アクセス2010. 01. 06.
- 文部科学省 看護学教育のあり方に関する検討 (2004) : 看護実践能力育成の充実に向けた大学卒業時の到達目標 (看護教育のあり方に関する検討会報告), http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/018-15/toushin/04032601.htm, アクセス2010. 12. 30.
- 長家智子 (2003). 看護学生のコミュニケーションに関する研究—生活体験と集団行動体験とコミュニケーション能力との関係に焦点を当てて—. *九州大学医学部保健学科紀要*. 第1号. 71-82.
- 成田円, 神野朋美, 畑瀬智恵美他 (2005). 採血技術演習の実際と今後の課題—静脈血採血の技術演習を困難にしている要因の検討—. *日本看護学会論文集 第35回看護教育*. 35. 15-17.
- 日本看護協会編 (2005). *平成17年版看護白書*. 日本看護協会出版会. 東京.
- 野々村典子, 中川克子 (1989). 看護系大学生の日常における手指の動きと家事経験. *日本看護学会論文集 第20回看護教育*. 20. 240-242.
- 小野晴子, 土井英子, 杉本幸枝他 (2003). 短期大学生入学初期の生活習慣獲得の実態. *新見公立短期大学紀要*. 24. 35-41.
- 田島桂子, 清川浩美, 野村志保子 (1994). 看護大学入学時における学生の学習レディネスに関する事前評価看護行動と関連する生活経験と学習をめぐる内容を中心に. *日本看護学教育学会誌*. 4 (1). 19-34.
- 中央教育審議会大学分科会制度・教育部会 学士課程教育の在り方に関する小委員会 (2007) : 学士課程教室の再構築に向けて, http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/071017/001.pdf, アクセス2009. 12. 30.
- 氏家幸子, 阿曾洋子 (1983). 学生の入学時の生活関連動作と看護実習の実態. *日本看護学会論文集 第14回看護教育*. 14. 281-284.
- Vaughn, S, Schumm, H, and Sinagub, Jane. (1996). 井下理監訳, 田部井潤, 柴原宣幸訳 (1999). *グループインタビューの技法*. 東京. 慶應義塾大学出版会.

A Review of Difficulties Encountered by New Nursing Students

Nobuko Okubo¹⁾, Sumiko Satake²⁾, Kumiko Ohashi¹⁾,
Yumi Sakyo¹⁾, Minako Ito¹⁾, Reiko Hachigasaki¹⁾,
Nobue Yasugahira²⁾, Akiko Ishimoto³⁾, Michiko Hishinuma¹⁾

1) St. Luke's College of Nursing, 2) Former St. Luke's College of Nursing

3) Hatsudai Rehabilitation Hospital

Summary

This study was carried out to clarify the difficulties faced by new students starting a curriculum of nursing science offered at a nursing college. The research design utilized exploratory factor analysis. A group interview regarding difficulties was conducted while an observer surveyed the reactions of the interviewees in accordance with an observation guide. Analysis was conducted by categorizing the research data, deriving subcategories and categories, and then calculating data sets to extract the degree of difficulties encountered.

As a result, 5 categories of difficulties were derived, listed as follows in order from the most data gathered to the least: "different learning style," "new environment," "insufficient understanding of course priorities," "inconvenience of learning resources," and "difference in desire and motivation to study nursing science." These difficulties can be surmised to stem from the state of Japan's secondary school/university education and generational characteristics. There is a need to develop a beginning nursing program based on those factors in the future.

Keywords : Fundamental nursing education, difficulties, nursing students, Generation Y, new students